

## 「スピリチュアリティ」入門

小池 靖

## スピリチュアル・ブーム？

パワースポット、スピリチュアル・カウンセラー江原啓之の「オーラの泉」、女性誌のスピリチュアル特集……この10年ほど、「宗教」に代わり「スピリチュアル」なものへの関心がさらに広がったと言われ、日本語においても「スピリチュアリティ」という用語が使われる機会が増えてきた。

そうしたスピリチュアリティ現象とは一体何なのか。それは、キリスト教をはじめとする伝統宗教にも何らかの変容をもたらしているのか。そうしたことを探ろうとする連続講義〈「スピリチュアリティ」入門〉が、本学の全学共通カリキュラムの総合 B 科目のひとつとして 2011 年度に開講された。

この科目は、文学部キリスト教学科・久保田浩准教授と、社会学部にて宗教社会学を担当している筆者との共同企画として発案され、主に、学外の宗教研究者を毎回お一人ずつゲスト・スピーカーとしてお招きし、ご自身の専門分野とスピリチュアリティとの関連を講義していただくというスタイルで実施した。

## 震災と宗教性

折しもこの講義は、東日本大震災の影響により、当初全 14 回であった予定を全 11 回に短縮して開講せざるを得なかった。そして、受講学生たちもまた、震災とスピリチュアリティといったテーマの回において、より強い関心

を示したようだった。

たとえば、「宗教と社会貢献」を専門とする大阪大准教授・稲場圭信氏は、自己を越えたものとのつながりや、先祖などに対して持つ「おかげ様」の念といったものを、日本人の「無自覚の宗教性」であると位置づけながら、震災復興における宗教者によるボランティア活動などを紹介した。

また、新宗教教団・金光教の教導職でもあり、「宗教者災害救援ネットワーク」に関わる渡辺順一氏は、『「無縁社会」に対するスピリチュアリティの挑戦』というタイトルで講義を行い、ホームレスなどの「痛み」を抱える人々への支援を通じた現代の「スピリチュアリティ」回復への試みを論じた。痛みがあるところにこそ、スピリチュアリティは渴望されるものだからであるという。

さらに、大阪市立大学研究員・白波瀬達也氏には、釜ヶ崎における野宿者支援の実体験をふまえて、キリスト教系団体を中心とする、宗教者による社会問題への貢献を語っていただいた。

稲場・渡辺・白波瀬氏の三者からは、人間が、困っている他者に手をさしのべる際の精神性といったものが共通していたように思われる。

## 健康からダライ・ラマまで

東京大学教授・鶴岡賀雄氏は、世界保健機関（WHO）で行われた、健康の定義において「スピリチュアルな」健康という言葉を入れるべきかどうかという議論を紹介し、現代社会の価値観

からはみ出るものへの欲求という側面がスピリチュアリティにはあること、また「スピリチュアリティ」の語は、宗教の現代的後継者としての役割があることなどを論じた。

また、本学兼任講師・江島尚俊氏は、「伝統仏教にみるスピリチュアリティ」と題して講義し、スピリチュアリティとは「自分を超えた何ものかにつながっている感覚」であると定義した。その上で、Google 画像検索によってスピリチュアルに関する現代のビジュアルイメージを示したあと、仏教においては曼荼羅などの絵解きを通して、聖なるものを集団で共有してゆく傾向があるとした。

さらに、本学兼任講師・宮坂清氏は、現代チベット宗教研究の見地から、ダライ・ラマやシャングリラ（理想郷）のイメージによって、チベット宗教が欧米社会においてもオルタナティブなスピリチュアリティの象徴として消費されてきたとし、チベットの側もまた、そのまなざし・期待に応えながら政治的の力を得てきた面もあったと論じた。

## つながりの可能性

スピリチュアルな若者文化を長年第一線で研究してきた大正大学教授・弓山達也氏は、ポピュラー文化に見られる「人生観に深く関わるメッセージ」は本質的にスピリチュアルであるとの認識を示し、「千の風になって」や平原綾香「Jupiter」といった流行歌も紹介しながら講義をおこなった。しかし、弓山教授は、自身が現代的なスピリチュアリティのみに期待してきた過去を相対化し、現在では、伝統的仏教行事も組み込んだ形で、地域住民につながりをもたらす目的の交流拠点「大正さろん」を、学生とともに豊島区で運営しているという。

上記四者の議論からは、伝統とのせめぎあいの中で、人間どうしが新たにつながる契機としてスピリチュアリティが活用される様子が論じられていたと言えよう。その他、講義では本学兼任講師・井上まどか氏、コミュニティ福祉学部教授・河東仁氏、筑波大学教授・津城寛文氏にもご登壇いただいた。ではこれらの多様な視点の議論をふまえて、我々は現代のスピリチュアリティについてどう整理すれば良いのだろうか。

## スピリチュアリティの隆盛

スピリチュアリティ概念が注目されたのは、1980年代以降の、アメリカを中心とした「ニューエイジ運動」の中で、「宗教」は好きではないが「スピリチュアリティ」の探求はしている、といった言葉遣いが台頭してきたことが大きなきっかけである。そこには、教義ばかりを強調し形骸化した「宗教」に対して、瞑想法や呼吸法など、むしろ感覚にじかに来る身体技法を基盤とした「スピリチュアリティ」の実践の重視、という志向があると見てよいだろう。

私自身は、1997年ごろよりスピリチュアリティを「超越的・超自然的な力や存在に自己が影響を受けている感覚」と定義しており、今回のこの連続講義でもまとめる際に紹介した。スピリチュアリティをこのように定義すると、もちろん伝統宗教にもスピリチュアルな側面はある。むしろ、共同体の中でスピリチュアルな事柄を専門としてきた職業集団こそが伝統宗教である。そうでなければ、これだけの多様な国・地域・文化を研究する多数の研究者が「スピリチュアリティ」のキーワードだけで連続講義をおこなえるはずもない。要するに、近年では従来の宗教や組織に対する嫌悪感から「宗教団体」抜き

でスピリチュアリティを探求したい人たちも出てきた、というのが真相であろう。

したがって、超自然性としてのスピリチュアリティという面では本質的な共通性はあるものの、「現代的なスピリチュアリティのみ」を探求する場合と、「伝統宗教」に関わる場合とで、個人の関わり方に違いが出てくるということも押さえておく必要があるだろう。

大まかに言って、霊能者の番組を見る、スピリチュアルな大衆書を読むといった「現代的なスピリチュアリティのみ」を探求する場合には、今ここの生への実利的な関心が高く、それを選択するかどうか人もそれぞれ好みであることが多い。他方、仏教やキリスト教などの伝統宗教に地域社会の中で関わる場合には、今の人生のみならず、死後の世界に対する関心も同様に高く、また、その実践は家族などの社会集団によって継承される場合が多い。時にその慣習に従うかどうかは、個人の選択の問題ではないことも多いのが伝統宗教の特徴であろう。

## 日本のスピリチュアリティ？

これまでも言われたように、日本人は、長い歴史の中で、異なる伝統・文化・宗教を日本流にミックスして取り入れてきた。それは、仏教や、キリスト教文化についても同様である。

スピリチュアリティが「超自然的な力や存在に自己影響を受けている感覚」であるとするならば、日本に古くから存在する占い、霊能者の世界も、スピリチュアルという言葉で形容されるようになってもおかしくはない。むしろ、昨今の「パワースポット」を扱った雑誌、ムックなどにおいては、明治神宮や地域の神社までもが、幸運を願う現代日本人にとってのスピリチュアルな場所

として表象されるようになってきている。

神も仏も、先祖霊も自然霊もすべてが神聖なものであり、トイレやかまどにも神様が居ると考えてきた日本人にとっては、もはや洋邦問わず宗教的なものすべてがスピリチュアルだとらえられても不思議ではない。

アメリカの研究書の中には、ニューエイジ運動を「非キリスト教的な文化の総体」と定義したのもあった。つまり欧米では、キリスト教という大きな伝統と、それに抵抗するオルタナティブなものという対比の中で新しいスピリチュアリティの探求がなされてきた。しかし日本では、霊的・神秘的なものについて、あまり個々に区別されることなく、何でもスピリチュアルだと形容されるようになってきたのである。それもまた、多様な外来の宗教文化の多くを自分たちのものとして大らかに受容し、矛盾することなく混交してきた日本らしいあり方なのである。

## スピリチュアリティ教育のゆくえ

もちろん、この講義でも、現代のスピリチュアリティ現象について、そのすべてを網羅的に表現できたわけではない。ホスピスなど医療現場におけるスピリチュアルケアや、商業的な「スピリチュアル産業」については充分には取り上げられなかった。それらは今後の課題である。

また、2012年度以降、全学共通カリキュラムにおける、教員によるこうした独自企画の連続講義が「総合B」カテゴリーから「主題別B」カテゴリーに再編されるにあたり、今後は、見解の対立するゲスト・スピーカーも積極的に登用し、ラインナップの充実につとめるべきであるとの方針も全カリ総合科目構想・運営チームからは示され

ている。今回のこの連続講義も、多様な立場のゲスト・スピーカーを招聘することができたため、スピリチュアリティの定義ひとつとっても、必ずしも全員が一致していたわけではなかった。しかし、それは履修者にとってはかえって良かったことなのではないかと思う。

2012年度も同じタイトルでこの科目を開講予定であるが、その時もまた、スピリチュアリティという新しいキーワードをめぐる最新の学問成果を、学生に提供する機会でありたいと考えている。

こいけ やすし  
(本学社会学部准教授)